

卒業の日に贈る言葉

中央大学の卒業証書・学位記に込められた願いを胸に



学長

福原 紀彦

FUKUHARA Tadahiko

様々な困難と不自由な時期にあっても、修学と研鑽を継続し、この度、幾多の試練を乗り越えて中央大学の学位記を取得された皆さんに対して、心からお祝い申し上げます。本学卒業生の学修や活動に際して、惜しめない支援や協力を寄せられたご父母とご家族、温かく力強い指導を戴いた教職員、連携先の地域・組織のご関係者、本学出身者の皆さんのご厚情や友情に、感謝と敬意を表します。

本日、卒業生に授与する卒業証書・学位記には、中央大学の伝統に支えられた大きな意義が存在します。本学の前身である英吉利法律学校の卒業証書には、他の大学の卒業証書にはない、「爾後永ク本校校友タルノ特権ヲ享有スベシ」との記載があり、本学創立者達の願いが込められていました。そこでいう特権とは、大学卒の学歴や本学卒業という学校歴がもたらす利益を意味しているのではなく、「實地應用ノ素ヲ養フ」との本学の建学の精神のもとで、表層的な知識や技能の獲得に終わらず、それらを公共性のある知性にかえ、それを確固たる志のもとに社会で発揮することを喜びとする、社会への貢献と人々の喜びを自分の喜びとする、そうした豊かな人生を送ることができることが本学卒業生の特権であると言っていたのではないのでしょうか。出合いを大切に、その豊かな生き方を享有する本学出身者のネットワークを卒業後も活用でき、また活用すべきことを特権と言っていたのだと思います。

大学は、人類の叡智を次世代に継承するために、人類の持続的可能性を支え、高度な知識基盤社会を築くエンジンとしての役割を果たし、SDGsの達成に向けて発展を続けています。これからも、皆さんが、生涯学び続ける姿勢を忘れずに、何度でも、大学で学び、また大学の活動に参加されることで、人生をさらに豊かにされることを期待致します。

中央大学は、本日より、皆さんにとって母なる学校たる「母校」となりますが、さらに、皆さんの今後の人生航路のための母なる港である「母港」でありたいと思います。いろいろな機会に、母校に戻り、母港に帰港して、この時期に巡り会った人間関係、これから巡り会う人間関係を大切に、元気にご活躍下さい。皆さんのご健康とご活躍を心から祈念致します。卒業ほんとうにおめでとう。素晴らしい人生を過ごして下さい。

「学士(法学)」の重みとその価値



法学部長
猪股 孝史
INOMATA Takashi

卒業生の皆さん、ご卒業、まことにおめでとうございます。皆さんに心よりお祝いを申し上げます。そして、この晴れの日を迎えるまで、卒業生の皆さんをよく理解し、寄り添ってこられた、ご家族の皆さん、ご関係の皆さんにも、祝意と敬意を表したく存じます。

中央大学は、1885(明治18)年、「英吉利法律学校」として創立されました。同年9月19日、江東中村楼で行われた開校式において、福澤諭吉は、以下のような祝辞を述べたと伝えられます(本学名誉教授・金原左門『法の実地応用』をふりかえって)中央評論296号[2016年]17頁)。

「法律は社会のあらゆる領域に及ぶものであり、法律は人間生々の学であり、多くの法律家が養成されることが期待される。成業の上、官吏・代言人になることだけが重要なことではない。そんなに沢山の官吏・代言人を社会が必要にしているわけでもないからである。諸君には官吏・代言人にならなくとも、その知識を様々な事業に適用して、一身を護り、一家を護り、屹然たる独立の男子となることを希望する。注意すべきことは、法律を学んで容易にこれを用いないことである。昔封建時代には、刀を抜いて犬を切る者は未熟な若武者に限る、真成の武士は終身刀を抜かず、抜けば必ず敵を切りて誤らずと言ったものである。諸君もこれに学び、(妄りに法知識を振り回すことなく、)法律を以て犬を切ることなく、常日頃は黙して法理を言わず、法知識を使うときは法の敵を斃し、自分の権利榮譽を護るべきである。法律学徒がどちらの途を歩むかは、学識が深い浅いかによる。学生の皆さんの学問が深くなることを期待する。」

この趣意は、卒業生の皆さんにも献じられてしかるべきものを含みます。ここで語られている言葉は、その当時の事情を考慮しても、現代からみればいささか穏当さに欠ける憾みがないではありません。けれども、その真意をしかと酌むならば、法を学び、法を学んだ者の心映えを見事に看破しているように思えます。

卒業生の皆さんは、中央大学法学部所定の課程において、法学、政治学を修めたことの証として、「学士(法学)」の学位を授与されました。皆さんの学問は深くなったものと拝察します。福澤諭吉がその祝辞に込めた趣意、そして「学士(法学)」のもつ重みとその価値を心に深く刻みつつ、卒業生の皆さんが、それぞれの進路や環境においてご発展、ご活躍されることを心から願って、はなむけの言葉とします。



経済学部長
山崎 朗
YAMASAKI Akira

大学を卒業するに際して、不安が募るのはなぜでしょうか。小学校、中学校、高校の卒業式では、上級学校進学への喜びや期待が別れの寂しさを凌駕したはずですが。しかし、大学卒業において皆さんが感じる不安は、これまでの卒業では味わったことがないものだと思います。大学の卒業がこれまでの卒業と異なるのは、人生の「転機」だからにほかなりません。

皆さんはこれまで勉学のみならず、スポーツ、アルバイト、ボランティア、インターンシップ、海外留学、就活など、さまざまな体験をしてきたことでしょう。しかし、それらの体験は、学校や学生という枠組みのなかにおける体験であり、「転機」とはいえません。

では、「転機」とは何でしょうか。それは、立場の逆転や反転です。具体的に言えば、生徒や学生が教師に、患者が医師や看護婦に、消費者が生産者へ、子どもが親へ、平社員が管理者へとといった立場の逆転・反転のことです。生徒や学生としてこれまで会得してきた技能や技法は、今後の人生においては、「直接的には」役に立ちません。

「二十過ぎればただの人」という言葉があります。神童と呼ばれた人たちも、年を取るにつれて平均的な才能の人間に近づいていくという意味です。しかし、私は、優秀な大学を出てもただの人になるのは、幼稚園から大学まで培ってきた学習能力という技能が新しいステージでは、学生時代のように有効に機能しないからだと考えています。

卒業生の9割近い皆さんは、就職されるでしょう。4月からは新入社員です。消費者であった皆さんは、生産者側へと異なるステージに移動します。大学の試験は60点以上で合格でした。しかし、60点の製品やサービスの供給を目標に、というわけにはいきません。3年も経てば後輩ができ、先輩社員として後輩社員の指導を任されるでしょう。さらに数年後は、主任や係長といった役職がつき、特定の部署の管理者という新しいステージに移動するはずですが。これから皆さんに求められる能力は、直観力、説得力、交渉力、指導力、決断力です。

卒業生の皆さん、不安からは何も生まれません。人生の「転機」を、人生の物語の主人公として楽しんでみてください。ぜひ、いつか皆さんの物語を後輩の学生たちにお聞かせください。

ご卒業、本当におめでとうございます。そして、中央大学経済学部を選んでいただいたこと、心から感謝いたします。これからもどうぞ中央大学経済学部をご支援ください。お体に気を付けて。

初めて人生の転機に立つ卒業生の皆さんへ

他人（ヒト）は変えられない 人は変わるもの



商学部長
渡辺 岳夫
WATANABE Takeo

卒業おめでとうございます。本年度は新型コロナウイルスの影響を受け、諸君の最後の一年間の学生生活は、通常とは大きく異なるものにならざるを得ませんでした。しかし、そのような環境下で、遅しく卒業研究に勤しみ、対外的な活動にも熱心に取り組んだ学生が数多くいることを私は知っています。ここに敬意を表するとともに、皆さんの旅立ちにあたってエールを送りたいと思います。

皆さんは、これから多くの人は権限と役割の階層関係から成り立っている「組織」において、少なくとも1日の三分の一を過ごすことになるでしょう。最初に属するレイヤーでは、おそらく自分が自由に振る舞うことのできる仕事のシーンは少ないでしょう。しかし、どんな仕事でも、自分の創意工夫を反映させる余地はあります。ある有名なコーヒーチェーンの会社の元社長の話ですが、駅前でコーヒーの割引券を街行く人に配る仕事にバイトが苦戦しているのを見て、代わりに社長自身が配ってみたところ、たった1時間余りで配布しきってしまったそうです。一見、つまらないルーティン業務でも、簡単すぎてつまらないと思えるような仕事でも、心の持ち様や見方を変えれば取り組みがいのあるものに変えることができるのです。組織において腐ってしまいそうな時には、自分の頭の中にある凝り固まったフレームをチェンジしてみましょう。

さて、そしていづれ諸君は「組織」におけるリーダーになっていくことでしょう。中央大学の卒業生の多くがそうであるように。上位のレイヤーに属するようになると、「組織」が実に人間臭い人間の集団であることを、否が応でも理解するようになるでしょう。人によって価値観、思想、宗教、あるいは善悪の基準などが多様であり、組織のために良かれと思ってしたことが、実際には組織にネガティブな影響を及ぼしてしまうこともあるのです。そういった際に、リーダーとしての皆さんはきっとこう思うでしょう。「他人（ヒト）を組織にとって望ましい方向に変えたい」と。しかし、他人（ヒト）は変えられません。人は自らの意思によってしか自らを変えることはできないのです。つまり人は変わることにしかできないのです。リーダーとしてのあなたができることは、人が自ら変わることができるような環境や条件を整えてあげることです。他人（ヒト）を変えられないと嘆いたり、自分の周りにはどうしてこんな他人（ヒト）ばかり集まるのだと不満を漏らしたりするべきではありません。それらは、自分にはリーダーとしての資質がないということ、周囲に知らしめる効果しかありません。

自分を変えられるのは自分だけです。たとえ毎日する仕事と同じでも、心の持ち様次第で、その仕事に対する取り組みを変えられます。心の持ち様を自ら変えることができるような、そして他人（ヒト）が心の持ち様を自然に変えることができるような環境を創ることができるような、そんな人を目指しませんか？



理工学部長
檜山 和男
KASHIYAMA Kazuo

理工学部卒業生および理工学研究科修士の皆さん、ご卒業・ご修了誠におめでとうございます。後楽園キャンパスでの学生生活はいかがでしたでしょうか？ 様々な思い出があることと思います。

今年度は、新学期のスタートと共に、新型コロナウイルス感染症の影響拡大に伴う緊急事態宣言が発令され、4月上旬から約2か月間、大学への入構ができなくなりました。そして、前期の授業はすべてオンラインとなり、宣言の解除後もほとんどの行事が延期や中止になり、皆さんが思い描いていた学生生活を送ることができませんでした。大変残念で悔しい思いをされたことと思います。そのような状況下で、卒業論文や修士論文を纏められましたことに、大いなる敬意を表したいと思います。

皆さんにとり、この1年間は全くの“想定外”だったと思います。ちょうど10年前に、東北地方を過去最大級の津波が襲い、未曾有の大災害が発生しましたが、その際に、この“想定外”という言葉がよく引用されました。今回は、世界中の人々が“想定外”を経験し、これまでとは全く異なる日常生活を強いられました。しかし、一方で、これを契機として新たな日常の仕組みやそれを支援するための技術も数多く提案されました。また、近未来の社会像である「Society 5.0」や国連が提唱する「SDGs」における課題解決に向けて、急速に革新の時代を迎えつつあり、理工系人材の皆さんには数多くの活躍の舞台が用意されています。是非、皆さんには、いつ降りかかるかもしれない“想定外”に対し粘り強く対処する適応力、英語では「レジリエンス」(resilience)と言いますが、しなやかなレジリエンス力を兼ね備えた、理工系人材のリーダーになっていただきたいと思います。

理工学部および理工学研究科の卒業生・修士はこれまでに約6万5千人を数え、様々な分野においてトップとなられた方もおり、目覚しい活躍しております。皆さんも先輩方の後に続いて、「中大理工」の名声をさらに高めてください。

最後になりますが、今年度は卒業式の祝賀会は中止となりましたが、理工学部では、今秋の大学祭期間中に第2回理工ホームカミングデーを開催する予定です。その際には、卒業生の交流の場を設けたいと思います。是非、元気な姿で再び後楽園キャンパスに戻ってきてください。皆さんのご活躍を心より祈念いたします。

想定外に対応できる理工系人材のリーダーに！

本学での学びを将来に



文学部長
宇佐美 毅
USAMI Takeshi

中央大学を卒業される皆さん、おめでとうございます。

皆さんの学生生活最後の1年間は、新型コロナウイルスの影響で思うような学生生活が送れなかったかもしれません。しかし、困難な状況の中にいるときほど、人間としての真価が試されると私は考えています。

物事が順調に進んでいるときは、人は誰でも気分がよく、本当の課題を見過ごしがちです。しかし、何か困難な状況が起こったときには、それまで見えていなかった課題や問題が表面にあらわれてきます。そのために、私たちの心がずさんでしまったり、他者を強く非難したり、人と人が衝突しやすくなったりするかもしれません。そんなときこそ、私たちの知性と真価が試されているのだと思います。

文学部は、数千年の過去から現在・未来までを対象とする学問分野を擁しています。医学系の学部でなくても、「病」や「感染症」に関連する歴史と現在を扱っている研究分野もあります。過去に人間はどのように「病」や「困難」に立ち向かってきたのか、そしてこれから私たちはどこに向かっていくべきなのか。そのヒントが、文学部の学問分野の至るところにあったはずですよ。

これからも、皆さんの人生の中で、思い通りにならないことが数多くあるかもしれません。だからこそ、思い描いた通りにならないときには、この中央大学のことを思い出してほしいのです。皆さんがこの4年間に学んだことは、単なる断片的な知識や、本の中だけに閉じられた知恵ではなかったはずですよ。皆さんは、講義、ゼミ、レポート、試験、合宿、フィールドワーク、研究発表、論文制作等々を通じて、課題発見能力、文献読解能力、プレゼンテーション能力、問題解決能力などを鍛えてきました。また、それらの研究活動や課外活動を通じて、多くの人と接し、その中でコミュニケーション能力を鍛え、人とかわりながら考えることの大切さを学んできました。

この中央大学で学んだそれらの能力、育んだ人間関係は、既に終わった過去のものではなく、皆さんのこれからの人生を豊かにするためにあります。それらを総動員すれば、皆さんの人生を一歩ずつ前に進めていくことがきっとできるはずです。自分の人生が思い描いていた通りにならないその時にこそ、皆さんがこの中央大学の卒業生であることを思い出してください。そこで何ができるのか。それこそが皆さん一人一人の真価なのです。

自分の頭で考え、自分の足で歩け



総合政策学部長
青木 英孝
AOKI Hidetaka

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。また、ご家族など、皆さんをこれまで支えてこられた方々にも謹んでお喜び申し上げます。

2020年は、本来であれば東京五輪が開催され、熱狂の年に最終学年が重なるという記憶に残る大学時代になるはずでした。TOKYOを訪れる世界の人々との交流を楽しみにしていた人も多いでしょう。しかし実際は、昨年の早春から今に至るまで、新型コロナ禍の一年でした。授業はオンライン中心になり、キャンパスでゼミやサークルの友人と会う機会は激減しました。ある意味、学生生活最後の一年がコロナ禍という歴史的出来事に当たってしまったことも人生の1ページだと思えます。

社会的には、リモートという働き方を含め、デジタル・トランスフォーメーションが急激に加速しました。皆さんは中大で“実地応用の素”を養ったわけですから、こういった不確実性が大きな時代にこそ、身につけた基礎力を応用し、しなやかに力強く生きていって欲しいと思います。ユニバーシティ・メッセージは“行動する知性”。ゼミ生には“自分の頭で考え、自分の足で歩け”と言ってきました。批判はするが自ら動けない人ではダメ。他人から言われたことだけをこなす指示待ちでもダメ。自分で考え、自分で行動すること。自立した大人であることが求められると思います。

学生生活を振り返ると、ゼミでの卒業研究、試験やレポート、リサーチ・フェスタなど、学びの場はたくさんあったと思います。多くの本を読み、先生やゼミ生と議論し、論理的思考力を鍛えられたでしょうか。スポーツや文化活動では、トレーニングで体を鍛えるとともに、音楽・美術・演劇・落語などに触れ、心を豊かにし、感性を磨きましたか。また、いわゆる社会勉強では、サークル、アルバイト、ボランティア、海外旅行など、キャンパス外でも貴重な経験ができたのではないのでしょうか。

総合政策学部では、学際性と国際性をベースに問題解決の手法を学んだと思いますが、文化や価値観の多様性を実感できたでしょうか。異文化理解力はグローバル化する社会で大きな価値を發揮し、複眼的思考は多様化する社会できっと役に立ちます。ダイバーシティが求められる今、学際性と国際性の力は、相手の立場に立って考えることや、相手を認めて許容するといった、人として本当に大切な姿勢に反映されてくるはずです。皆さんが手にした学位記は中央大学で学んだ証です。中大卒業生としての自覚と自信をもって、新しいフィールドでも益々活躍ください。

余談ですが、先日ゼミ生と「初任給どうするトーク」をしました。ぜひ、皆さんをこれまで支えてくれた大切な人に、感謝の気持ちを伝えてください。普段から何気なく感謝していても、気持ちを素直に伝えられる機会はさほど多くないかもしれませんので。